

# 序文

大分市長 上田保

わが郷土の歴史をひもといて見る時、大友氏ほど長い間支配をつづけたものではなく、而して同氏ほど世界的な影響を郷土に与えたものはない。中でも宗麟の時代は、鎌倉時代以来の潜勢力が一時に開花して、政治上、軍事上はもちろん、経済的にも文化的にも、大友時代の黄金時代を現出し、遠く海外までその名は喧伝された。

宗麟の軍事上、政治上の卓抜な才能についてはさることながら、私はとくに彼の西洋文化やキリスト教に対する受容の態度、云いかえると、彼の文化性や人間性の面に強く心をひかれる。弘治二年ピンントに会って、はじめてキリスト教を聞いた時の彼の敬虔な態度、諸種の事情によってはるかに後れたが、ついに受洗の素志を果して専ら清い信仰生活に生き、最後まで手を合せて主に祈り、聖徒の如く死んだという厳肅な姿等は、その入信を単なる手段に過ぎないとするには、余りにも誠実であり荘厳でありすぎる。現実的な文化の輸入だけではなく、それを越えたより高い精神えのあこがれと、より新しい心のモラルを打ち立てようとなやんだ人間宗麟に、深い尊敬と愛着を感じるのである。

当市においては、以上のような、西洋文化の華をはじめて咲かした先覚宗麟の遺業を顕彰するため、すでにクリンタン文化センターの建設を計画し、着々その準備を整えつつある。戦時中取りのぞかれた神宮寺浦の宗麟銅像も、すでに復原が成り、除幕式も近々に迫っている。

こうした際に、大分県地方史研究会が大友宗麟特輯号を発刊するに至ったことは、まことに時宜を得た企てであると思う。これをきっかけとして、さらに一層この方面の研究が進められるならば、裨益されるところは、敢えて当市や郷土のみではないであろう。

求められるままに、あえて小文を記し、序とする次第である。